受難節第５主日礼拝説教「何を願っているのか？」予稿

日本基督教団石神井教会　2026年3月22日

**【使徒書日課】ローマの信徒への手紙　5章1～11節**

1このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの
主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、2このキリストのお陰
で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにし
ています。3そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知ってい
るのです、苦難は忍耐を、4忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。5希
望はわたしたちを欺くことがありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、
神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。6実にキリストは、わたした
ちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。
7正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない
者ならいるかもしれません。8しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キ
リストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対
する愛を示されました。9それで今や、わたしたちはキリストの血によって義と
されたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのこ
とです。10敵であったときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいた
のであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさ
らです。11それだけでなく、わたしたちの主イエス・キリストによって、わたし
たちは神を誇りとしています。今やこのキリストを通して和解させていただいた
からです。

**【福音書日課】マルコによる福音書　10章32～45節**

32一行がエルサレムへ上って行く途中、イエスは先頭に立って進んで行かれた。
それを見て、弟子たちは驚き、従う者たちは恐れた。イエスは再び十二人を呼び
寄せて、自分の身に起ころうとしていることを話し始められた。33「今、わたし
たちはエルサレムへ上って行く。人の子は祭司長たちや律法学者たちに引き渡さ
れる。彼らは死刑を宣告して異邦人に引き渡す。34異邦人は人の子を侮辱し、唾
をかけ、鞭打ったうえで殺す。そして、人の子は三日の後に復活する。」
35ゼベダイの子ヤコブとヨハネが進み出て、イエスに言った。「先生、お願い
することをかなえていただきたいのですが。」36イエスが、「何をしてほしいの
か」と言われると、37二人は言った。「栄光をお受けになるとき、わたしどもの
一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください。」38イエスは言われた。
「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない。このわたしが飲む
杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受けることができるか。」39彼らが、「で
きます」と言うと、イエスは言われた。「確かに、あなたがたはわたしが飲む杯

を飲み、わたしが受ける洗礼を受けることになる。40しかし、わたしの右や左に
だれが座るかは、わたしの決めることではない。それは、定められた人々に許さ
れるのだ。」41ほかの十人の者はこれを聞いて、ヤコブとヨハネのことで腹を立
て始めた。42そこで、イエスは一同を呼び寄せて言われた。「あなたがたも知っ
ているように、異邦人の間では、支配者と見なされている人々が民を支配し、偉
い人たちが権力を振るっている。43しかし、あなたがたの間では、そうではない。
あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、44いちばん上になり
たい者は、すべての人の僕になりなさい。45人の子は仕えられるためではなく仕
えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのであ
る。」

**主イエスは先頭に立って…【こども説教のために】**

日曜日の朝、教会へと集められて来たわたしたちは、一週間の中で一時間ほどの礼拝を共にしているだけかもしれません。けれども、本当に願っていることは、人生の旅を共に歩んで行くことです。一人のお方が始めてくださった人生の旅に後から加わり、ついて行くために、教会へと招き集められました。その旅路から逸れてしまうことがないように、日曜日ごとに教会で道標を確かめながら、それぞれの歩みを続けているのです。

この旅の先頭を歩んでくださっているのは、主イエスです。二千年前、たった一人でこの旅の歩みを始めてくださいました。「わたしについて来なさい」（マルコ 1:17）と呼びかけ、後に従って来るようになった弟子たちと、旅を続けてくださいました。弟子たちは、初めのうちは、この旅がどこに向かっているものなのか、分からなかったかもしれません。それでも、主イエスは、弟子たちが共に旅を続けられるように励まし、その道の行く先をお示しくださったのです。旅を共にする一行は、初めは少数だったかもしれませんが、後に続く者が絶えることなく、二千年続いたのです。わたしたちは、その一行の最後尾に続こうとしている者たちです。

主イエスの旅は、エルサレムに向かうものでした。そこに向かって、主**イエスは先頭に立って進んで行かれ**ました。**それを見て、弟子たちは驚き、従う者たちは恐れた**と言います。エルサレムで起こる恐ろしいことを、主イエスから聞かされていたからです。けれども、その旅は、エルサレムですべてが終わるものではありませんでした。エルサレムを通り抜けて、主イエスが導いてくださる旅は、世界中に広がり続けられてきたのです。

主イエスは、「**仕えられるためではなく仕えるために…自分の命を献げるために**」人生の旅を行かれました。それは、わたしたちが当たり前に願う人生とは異なるものかもしれませんが、貴い命を分かち合う人生の旅なのです。

**願い**

石神井教会では、毎日曜日の主日礼拝を子どもたちと共にするようになる以前から、「18 歳の祝福」をしてきました。キリスト教学校の紹介などで「こどもの教会（教会学校）」に招かれて来ていた子どもたちが、高校卒業と同時に教会を卒業していってしまう現実を受けとめながら、それでもなお、彼ら彼女らのことを教会がいつでも歓迎し、待ち続けていることを示したい、という願いからです。現実には、信者の家庭で育つなどした子どもを除けば、学校の指導から自由になった者たちが教会に来続けることは稀です。それでも、まったくいないわけではありません。あるいは、他の教会へと招かれて行く者も無いわけではありません。「18 歳の祝福」は、わたしたちの願いを越えて為される神の御業に希望を託す営みなのです。

先週の日曜日、伝道献身者壮行礼拝をもって伝道者として立て、送り出した榊原かをる神学生は、今日、関係する他の教会で挨拶を交わした後、今週中には任地として示された沖縄に旅立たれます。もはや、わたしたちは「神学生」と呼ぶべきではないでしょう。順調に手続きが進めば、5 月下旬には沖縄教区で補教師准允式が執り行われ、「伝道師」として正式に教会に就任することになるはずです。わたしたちは、この手続きが順調に進むことを願い、また、そこから始まる伝道者としての働きが支え導かれることを、送り出した教会として大いに期待もしているのです。

けれども、これから始められる伝道者としての働きの場は、本人が願うとおりのものではないかもしれません。もしかすると、その結果は、わたしたちが期待するようなものとならないかもしれません。「**あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない**」と、主イエスにお叱りを受けるときが来るかもしれません。それでも、わたしたちは皆、主イエスと結ばれるしるしとして洗礼を授けていただいてきた者たちです。「**確かに、あなたがたはわたしが飲む杯を飲み、わたしが受ける洗礼を受けることになる**」と、主イエスは、わたしたちが送り出した伝道者にも、わたしたちにも、お告げくださっているのです。わたしたちは、ただわたしたちの願いを越えて御心を為してくださる神の御手の導きに希望を託して、送り出した伝道者と共に歩もうとしています。

わたしたちは、送り出した伝道者と、与えられる祝福を、喜びをもって分かち合うことになるでしょう。そして、与えられる困難や苦難をも、忍耐をもって分かち合おうとしています。使徒パウロと共に、**苦難をも誇り**とするのです。わたしたちも知っているからです、**苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを**。わたしたちは、主イエスがその道でお示しくださった**神の栄光にあずかる希望を誇り**としているのです。

**不信心な者のために**

今年の「受難節（レント）」の歩みも残り三分の一、二週間です。わたしたちは今年も、主イエスがエルサレムに向かわれたこと、その地で人々の手に引き渡されたこと、彼らから死の宣告を受け、侮辱され、鞭打たれた後に十字架につけられたことを記念しようとしています。そのことを深く胸に刻み、主の御苦しみを受けとめた後に、主のご復活を見ようとしています。

ご復活の祝い（イースター）を、今年もわたしたちは祝うことを許されるでしょう。その日には、晴れやかな気持ちで、どなたとも喜びを分かち合いたいのです。その日だけ祝いのために訪れる方とも、日曜日ごとに教会に来ることを必要と思っていない方とも、主イエスに従うことを知らずにいる方とも、その日には、共に喜びを分かち合う者とされたいのです。そのために、わたしたちは、ささやかながら祝いの準備もしてその日を迎えることになるでしょう。

わたしたちは、ご復活の祝いを大切にいたします。わたしたちの信仰の核心とも言える祝いだからです。それでも、わたしたちは、その祝いのときに自分自身が光り輝き、与えられるもので満たされることよりも、別のことを願う者でありたいのです。他の人々が光り輝き、他の者たちが与えられる恵みを受け取り、その手を満たされ、心満たされるようになることを、願う者でありたいのです。主イエスが、そのような道を行かれ、そうしなさいとお教えだからです。「**あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、すべての人の僕になりなさい**」。

本当には、わたしたちも、偉くなりたいのです。いちばん上になりたいのです。主がお受けになられる栄光の傍らで、同じ栄光に浴したいのです。自分たちと、自分たちの仲間たちこそ、栄光をお受けになられる主イエスの右と左に座らせていただきたいのです。

それでも、わたしたちは、この願いを捨てる道を行こうとしています。エルサレムに向かわれた主イエスの後に従って、十字架に向かわれた主イエスの後姿を追いながら、自分の光り輝くことを求める願いを、少しでも捨てて行こうとしています。そうすることが、主に倣うことだからです。主に倣ってそのように自分を捨てる道を、わたしたちより少し先に歩まれた先達が、わたしたちに仕えて見せ、僕として生きて見せてくれたからです。

わたしたちが**不信心な者**であったときに、自分のためのときを手放し、自分の人生を引き渡して、わたしたちに仕えてくれた先達が、教会の歴史を作ってきました。キリスト者の群れの旅を、二千年間受け継いできました。わたしたちも、そこに加わるのです。皆に仕える者になり、すべての人の僕になるのです。